

東舞鶴駅前商店街の現状と活性化に関する考察

建設システム工学科 宮元健次

1, はじめに

人口減少と少子化を要因とした中心市街地の衰退化は、全国的な傾向であり、東舞鶴駅前についても例外ではない。

そこで、2007年度校長裁量経費により「東舞鶴駅前商店街の現状と活性化に関する考察」として、主に卒業研究履修学生と共におおよそ下記の手順で調査・研究を行った。次項以下、各調査結果と活性化の提案について概要を報告する。

- ①東舞鶴商店街における現状のアンケート調査
- ②世帯数による空洞化調査
- ③人口密度によるスプロール調査
- ④地域別人口によるスプロール調査
- ⑤まちづくり3法によるコンパクトシティ化による活性化の提案

2, 東舞鶴商店街における現状のアンケート調査結果

2007年10月1日より11月8日にかけて20項目についてのアンケート調査を行った結果、80店舗中、75店舗より解答があった。集計結果について、中でも顕著な傾向を示した4項目について下に掲げる。

図1

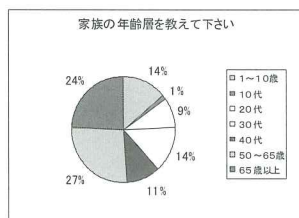


図2

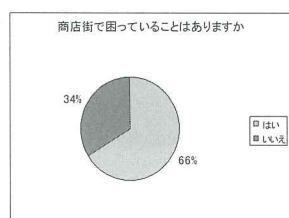


図3

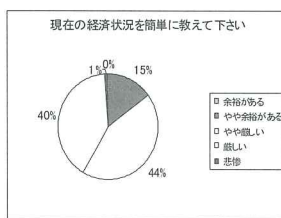
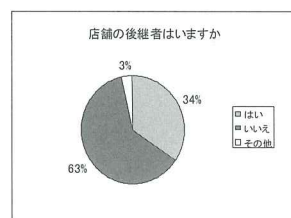


図4



このグラフから、まず年齢層については、図1から半数以上が50歳以上であり、また図2より60%以上が商店街での生活に不満を持つことがわかる。

さらに経済状況についても図3から「やや厳しい」という解答が44%「厳しい」が40%に達した。

その他図4より店舗の後継者がいないという解答が63%に達しており、これらの結果から、高齢化、経済状態への不満、後継者不足などの傾向が高いことが指摘できる。

3, 世帯数による空洞化調査

次に全国の中心市街地に数多く見られる空洞化について調査した。すなわち、東舞鶴駅を中心として半径200メートルごとの人口と世帯数について、「2007年度舞鶴市統計書」の人口数と世帯数をもとに割り出した結果図5のような推移となった。

これをみると、中心から離れるほど世帯数、人口とも増加しており、空洞化が起きていることが確認できる。

4, 人口密度によるスプロール調査

図 5

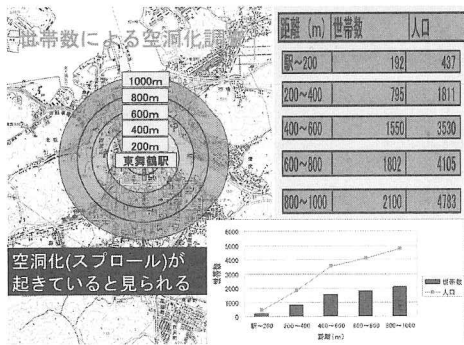
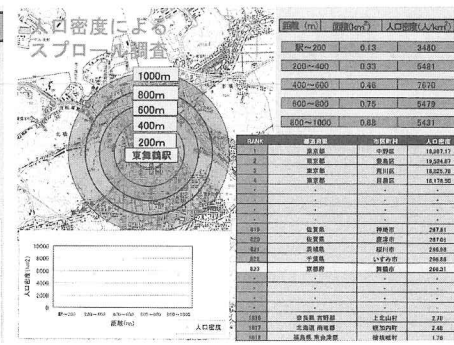


図 6



3と同様、「2007年度舞鶴市統計書」の人口数をもとに、東舞鶴駅を中心として半径200メートルごとの人口密度を割り出したところ図6のような結果となった。

これをみると駅から400~600メートルの地域が最も人口密度が高くなっていることがわかり、中心市街地が空洞化するいわゆるスプロールが起きていることが確認できる。

5、地域別人口によるスプロール調査

3と同様「2007年度舞鶴市統計書」の人口数をもとに町別地域人口を割り出したところ、図7のような結果となった。これを見ると、駅周辺の中心市街地は100~200人を示すのに対し、周辺地域では300人以上を示す町が多く、4と同様、スプロールが起きていることが確認できる。

図 7

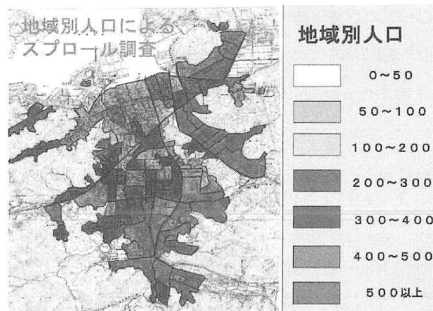
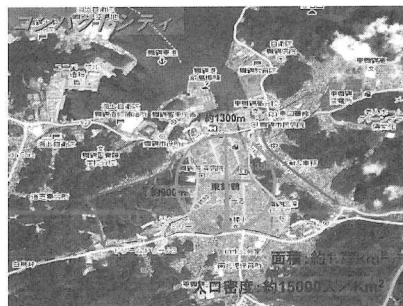


図 8



6、まちづくり3法によるコンパクトシティ化による活性化の提案

2006年5月に中心市街地活性化法、大規模小売店舗立地法、改正都市計画法のいわゆる「まちづくり3法」が公布された。これは人口減少と少子化による中心市街地の衰退に歯止めをかけるため、中心市街地に主要都市機能と住居地域をまとめようとするいわゆる「コンパクトシティ」化のための法律である。本報告2, 3, 4, 5の調査結果からみて、東舞鶴駅前の衰退は、全国的な傾向、すなわちスプロールによる空洞化が起因とみられ、「まちづくり3法」によるコンパクトシティ化が、活性化の常套手段として適すものとみられる。この法律の定める人口密度1500人/kmという最適値に、東舞鶴駅を中心とした平坦地を求めると図8のようになる。

紙面の関係上、詳細は省略するが、この範囲をパークアンドライド化し、廃止する道路の交通量を確保する4本のバイパス及び公共駐車場の提案したい。

7、今後の課題

以上、行った調査、提案の一端に過ぎないが、その概要をまとめた。実際はこれら以外の16項目のアンケート調査の分析結果及び、上記6と異なるコンパクトシティ化による活性化案が存在する。

今後はより精密な分析を行い、より緻密かつ具体的なマスタープランを作成し、舞鶴市へ提案したいと考える。